

平成22年5月21日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19730246  
 研究課題名（和文）：企業家のキャリアと産業ネットワークのダイナミズムに関する実証研究  
 研究課題名（英文）：An empirical research on the dynamic relation between entrepreneurial career and industrial network  
 研究代表者  
 宇田 忠司（UDA TADASHI）  
 北海道大学・大学院経済学研究科・准教授  
 研究者番号：80431378

研究成果の概要（和文）：本研究の成果として、以下の二点が挙げられる。まず、企業家のキャリアと産業ネットワークに関連する既存研究を詳細に整理・検討した上で、産業構造と行為者の実践をダイナミックに捉える新たな分析視角を提示したことである。また、上記の視角に基づく実証研究を通じて、コンテンツ産業における企業家のキャリアと産業構造の動的関係に関する興味深いファインディングスを得たことである。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are summarized as follows. Firstly, new viewpoints which grasp dynamic relation between industrial structure and practices of actors are presented through a detailed review of existing researches concerning entrepreneurial career and industrial network. Secondly, as a result of empirical researches utilizing viewpoints mentioned above, we have acquired some meaningful findings regarding dynamic relation between entrepreneurial careers and industrial structure in content industry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1200,000	360,000	1,560,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	540,000	3,240,000

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学

キーワード：企業家、キャリア、コンテンツ産業、ネットワーク、構造／制度

## 1. 研究開始当初の背景

企業家活動と産業ネットワークの関係を捉えようとする研究は、かなり以前から国内外において蓄積されてきた（e.g. Birley, 1985; 金井, 1994）。しかしながら、そうした

既存研究は以下のような限界を内包しており、これを乗り越えようとする問題意識が本研究の着想に至った。

第一に、シュンペーター以来、企業家の活動にアプローチする研究は長年に渡って盛

んに蓄積されてきたが、独立・起業に及ぶ個人をキャリアという時間幅で捉えようとする試みは十分になされていない。近年の欧米の先端的議論では、個人が独立・起業に至るメカニズムを含めて、企業家の活動プロセスをより長いスパンで詳細に解明していくことの重要性が指摘されている (Kisfalvi, 2002)。

第二に、既存研究において、企業家が活動する舞台として取り上げられてきた産業は、ハイテク産業が中心であり、コンテンツ産業に焦点をあてた研究は乏しかった。付加価値の高いコンテンツの制作・活用は、わが国だけでなく世界的に重要な課題であるが、当該産業で活動する企業家のキャリアの実態や各アクターによって構成されるネットワークの様相は依然として不透明である感がぬぐえない。

第三に、企業家は、一企業の境界を超えて産業という枠組みで多様な主体と結びつきながら活動するが、彼らのキャリア形成を各アクターとの相互関係という視角から実証的に解明しようとする研究は非常に乏しい。確かに、関係性を通じたキャリアについて概念的な議論が重ねられてはいる (e.g. Fletcher, 1996)。しかしながら、Barley and Kunda (2004) を除けば、上記の課題にアプローチする詳細な調査研究はほとんど見当たらない。

第四に、企業家をはじめとする産業内のアクターは、自らを取り巻く産業構造から影響を受けるが、既存研究では、各アクターの行為に過度に焦点化する余り、構造という視点が看過されがちであった。各アクターは、真空状態で行動しているわけではなく、既存の構造に埋め込まれている。しかしながら、ここで注意すべきことは、各アクターの行為が、産業構造に一方的に規定されるわけではないということである。企業家をはじめ多様なアクターの戦略性に基づく行為は、既存の構造の再編を促しうることを忘れてはならない。

## 2. 研究の目的

上記の四点を踏まえて、本研究では、産業内の各アクターの意図・行動に影響を及ぼす制度/構造と、それに対する各アクターの戦略的行為を統合した視点から、コンテンツ産業における企業家のキャリアと産業ネットワークのダイナミズムに迫っていくことにした。

より具体的には、(1) 企業家のキャリア形成の実態 (コンテンツ産業で独立・起業した個人は、どのようなコンテクストの中でどの

ようなキャリアを形成しているのか) と、(2) 産業ネットワークの様相 (産業内の多様なアクターはどのような相互関係を築いているのか) を明らかにしたうえで、(3) 企業家のキャリアと産業ネットワークとのダイナミックな関係性 (各アクターから構成されるネットワークは企業家の行為にどのような影響を及ぼし、一方、企業家の行為を通じて既存の産業ネットワークはどのように再構成されるのか) という課題についてアプローチした。

なお、このような課題の解明を志向する本研究は、以下のような理論的・実践的意義を有している。

まず、コンテンツ産業における企業家のキャリアとネットワーク、さらに双方のダイナミックな関係性についての綿密な実証研究は、国内外問わず依然として乏しいため、本研究の学術的意義は高い。

世界的に産業構造の転換が進む中、コンテンツの開発・活用を通じた価値創出は非常に重要な命題である。しかし、欧米でさえ詳細な調査研究が徐々に蓄積されはじめたばかりである。それゆえ、この時期に精緻な理論的枠組みを構築し、かつ実証研究を実施することの理論的意義は非常に大きいと言える。

他方、コンテンツ産業の発展・振興は、わが国の産業全体から見ても優先的課題のひとつである。そのため、コンテンツの制作・活用を促す人材の育成支援ならびに産業の活性化に結びつくネットワークの構築に関する知見の提示は実践的にも大きな意義があるといえる。

## 3. 研究の方法

本研究は、3年という交付期間内に上記の課題について以下のかたちで明らかにしていこうとした。

第一に、企業家のキャリア形成および産業ネットワーク (人材育成の議論も含む) を巡る既存研究の徹底的な整理検討を通じて、より綿密に問題・限界を明らかにし、精緻な理論的枠組みを構築することである。

第二に、コンテンツ産業の各アクターに対する綿密な調査研究を実施し、企業家のキャリアの実態と産業ネットワークの様相を明らかにしたうえで、双方のダイナミックな関係性に迫ることである。具体的な調査手法については、インテンシブな聞き取り調査を主たるものとして位置づけ、併せて、ライフストーリーの編集や、参与観察といった定性的手法が用いられた。

なお、各アクターとは、主に、独立・起業

したクリエイター（企業家）、クライアント（発注企業/発注者）、エージェント（代理人）、インキュベーター（育成支援者）である。

研究代表者は、大学院在学中より一貫して、コンテンツ産業で活動する個人や企業、組織に対する詳細なフィールド調査を展開してきた。したがって、これまでの研究活動で培ってきた人的ネットワークを活かすことで、上記のような多様なアクターへアクセスすることが十分期待できた。

以上のように、本研究は、精緻な理論的枠組みの整備と綿密な質的調査の実施を通じて、研究テーマに関する理論的な厳密性と研究成果の実践性を志向するかたちで展開された。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、大きく以下の二点が挙げられる。

第一に、企業家のキャリアと産業ネットワークに関連する既存研究を詳細に整理・検討した上で、産業構造と行為者の実践をダイナミックに捉える新たな分析視角を提示したことである。

具体的には、まず、「境界のないキャリア概念の展開と課題」において、社会構造や産業コンテキストからの影響と、その中で戦略的な振舞いの両面から個人のキャリアを捉える視角を提示した。このようなアプローチは、企業からの独立や自律の重要性を強調する一方で、キャリア形成に及ぼす構造的要因を看過しがちな近年の「素朴な」自律的キャリア形成論の問題を指摘し、その乗り越えを企図するものである。

併せて、企業内キャリアとは異なり、個人のキャリアが一企業の枠組みを超えて展開するからこそ、他のアクターとの相互関係を通じてキャリアを解明していく必要性を唱えた。加えて、このような志向性は、ある産業内の各アクターの相互関係が既存の構造又はコンテキストをどのように再構成するのかという議論への示唆も提供するため、ミクロ・レベルに終始しがちなキャリア研究のマクロ方向への拡張可能性を指摘した。

次いで、「フリーランスの言説スペクトル」において、本研究の主要な対象であるフリーランスを巡る既存の言説に関する詳細な検討を通じて、研究者をも含めた権力関係によって覆い隠される主体の多面的な実践を捉える視角が提示された。

また、この論考でフリーランスを巡る言説の錯綜した様相を紐解いた結果、関連する既存研究は次の三つの言説に大別されること

を示した。すなわち、自由や自律といった側面が強調され、独立独歩の自由騎士を想起させる「騎士」言説と、服従や隷属といった側面が強調され、社会に従属する弱者を想起させる「従僕」言説、自由や自律に加え創造や変革といった側面が強調され、革新的な開拓者・先導者を想起させる「英雄」言説である。

その上で、各言説が紡ぎだされる力学を検討した結果、フリーランスや企業に加え我々研究者も言説の形成・強化に不可避免的に荷担していることを指摘した。

第二に、上記の視角に基づく実証研究を通じて、コンテンツ産業における企業家のキャリアと産業構造の動的関係について、理論的・実践的に興味深い知見を得たことである。

具体的には、まず、「インキュベーション施設におけるクリエイターのアイデンティティと行為戦略の発現メカニズム」において、同じインキュベーション施設に入居する3名のフリーランス・クリエイターのライフヒストリーを詳細に分析した上で彼らの多様性に満ちた行為戦略の発現メカニズムを記述した。

とりわけ、彼らが他者との既存の関係の中で異なるアイデンティティを構築してきた過程、及びそれらを充足させるために日々の仕事や他者との関係の中で採る様々な変革や見直しを厚く描いた。

ここで重要な点は、フリーランス・クリエイターが先天的かつ固定的で同質的なアイデンティティを抱いておらず、むしろ既存の関係の中で異なるアイデンティティを(再)構築し、業界構造に埋め込まれながらも、それに応じて異なる問題を認識し、多様な行為戦略を展開していることである。また、彼らの多様な戦略的行為が既存の構造の再生産や変容に結びついていることも看過できない。

次いで、「制度的企業家をめぐる理論射程の経験的検討」において、制度的企業家の実践を捉える有力な研究方法の一つである言説分析を試み、その可能性を示した。ここで、制度的企業家とは近年欧米で盛んに議論されている制度派組織論における中心的トピックであり、制度変化をもたらす行為者を指す。この論考では、制度的企業家として、具体的にフリーランス・クリエイターに注目し、読み、書き、語るといった彼らの発話に制度を担う人々の実践を見出す試みの意義を経験的に示した。

その上で、「制度的企業家の言説分析—フリーランス・クリエイターの世界—」において、彼らの世界の詳細な記述及び関連する言

説の解体という既存の議論の徹底的な相対化を通じて、彼らの多面的な実践を捉えるとともに、言説の背後に潜む権力関係及びそれにより隠蔽されるものを炙り出した。

ただ、言説分析について更なる理論的検討を重ねた結果、上記の論考も含め既存研究の多くの議論が主体の実践について語る我々を特権化した研究に終始しがちであることを見出した。

そこで、「制度の言説分析—フリーランス研究における英雄・騎士・従僕—（国内主要学術誌に投稿中）」において言説分析の徹底的な遂行を図った。具体的には、当事者の語りを研究者の言説に接続するのではなく、研究者も現実＝制度を構成する主体であることを自覚した上で、発話を媒介として取り結ばれる主体間の権力関係を捉える批判的記述に真摯に取り組んだ。

この論考を通じて見出された特に興味深い点は、当事者であるフリーランスもまた、クライアントや同業他社等との関係において既存の言説を用いて巧みに演技することで自らの思惑を遂げようとしていることである。このような知見は、個々のフリーランスが駆使する語りの一局面を拾い上げ類型化を図るような研究アプローチでは捉えられておらず、貴重だといえる。

最後に、「フリーランス・クリエイターを巡るコンテンツ産業の構造—その現状と課題—」において、彼らを巡る産業構造の現状を具体的に示した上で、産業振興を図るための課題とその解決に向けた指針を論じた。

その結果、わが国のコンテンツ産業では、既存の分業構造の再生産等に伴い、人的ネットワークが固定化・偏在化する傾向にあるため、ネットワークを積極的に再編成していく必要性を指摘した。また、その際に特に以下の問題の解決が鍵になることを唱えた。

まず、特に学生時代やキャリア初期における教育・訓練機会の整備を通じて、クリエイター自身が自らの仕事を広くビジネスの中に位置づけていく意識を醸成していくことである。また、クリエイティビティの効果を如実に示す成功事例の蓄積や発信等を通じて、創造性への理解や認識が不十分なクライアントを啓蒙していくことである。

この論考は、関連する既存研究の多くが市場の推移、構造特性やその変容、価値の創出プロセス等といったマクロな視点から論じている中、実際にコンテンツを制作するアクターの視点から産業構造について検討しており、一定の理論的・実践的な示唆をもたらしたといえる。

以上のように、3年間に及ぶ本研究の成果は、経営学の先端的領域の詳細な整理検討及び、それを踏まえた経験的研究の蓄積という理論的意義と、国家レベルの戦略的課題の一つであるコンテンツ産業を担う人材の輩出・育成や産業振興への示唆という実践的意義を有すると考えられる。

なお、現時点で、本研究の成果の全てを具体的なアウトプットとして提示できていないため、引き続き研究成果の公表に努めていく。

#### ※引用文献

- Barley, S.R. and G. Kunda (2004) “*Gurus, Hired Guns, and Warm Bodies: Itinerant Experts in a Knowledge Economy*”, Princeton University Press.
- Birley, S. (1985) “The role of networks in the entrepreneurship process,” *Journal of Business Venturing*, Vol. 1, No. 1, pp. 107-117.
- Fletcher, J. K. (1996) “A Relational Approach to the Protean Worker,” in Hall, D.T. eds., *The Career is Dead—Long Live the Career: a relational approach to careers*, Jossey-Bass.
- Jones, C (1996) “Careers in project networks: The case of the film industry”, in Arthur, M.B. and D.M. Rousseau eds., *The Boundaryless Career: A New Employment Principle for a New Organizational Era*, Oxford University Press.
- 金井壽宏(1994) 『企業者ネットワークの世界—MIT とボストン近辺の企業者コミュニティの探求—』白桃書房。
- Kisfalvi, V. (2002) “The entrepreneur’s character, life issues, and strategy making: A field study”, *Journal of Business Venturing*, Vol. 17, pp. 489-518.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 宇田忠司、「フリーランスの言説スペクトル—英雄・騎士・従僕—」、『経済学研究』、59巻、215-224頁、2009年、査読無、(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/40129>)。
- ② 宇田忠司、「境界のないキャリア概念の展開と課題」、『経済学研究』、57巻、63-84

頁、2007年、査読無、  
(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/25167>)。

〔その他〕(計2件)

- ① 宇田忠司・高橋勅徳、「制度的企業家の言説分析—フリーランス・クリエイターの世界—」、Discussion Paper (北海道大学) Series B、1-27頁、2008年、査読無
- ② 宇田忠司・高橋勅徳、「インキュベーション施設におけるクリエイターのアイデンティティと行為戦略の発現メカニズム」首都大学東京リサーチペーパー、1-25頁、2007年、査読無

〔学会発表〕(計2件)

- ① 宇田忠司、「フリーランス・クリエイターを巡るコンテンツ産業の構造—その現状と課題—」、日本生産管理学会全国大会、2010年3月14日、北海道大学
- ② 桑田耕太郎・松嶋登・高橋勅徳・水越康介・山口みどり・宇田忠司、「制度的企業家をめぐる理論射程の経験的検討」、組織学会研究発表大会、2008年6月7日、神戸大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宇田 忠司 (UDA TADASHI)  
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授  
研究者番号：80431378

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者

高橋勅徳 (TAKAHASHI MASANORI)  
首都大学・大学院社会科学研究所・准教授  
研究者番号：70352482  
松嶋登 (MATSUSHIMA NOBORU)  
神戸大学・大学院経営学研究科・准教授  
研究者番号：10347263  
加藤厚海 (KATO ATSUMI)  
広島大学・大学院社会科学研究所・准教授  
研究者番号：10388712